戦時下の小学生

福岡市東区　　塚本　泰盛

昭和１６年４月、この年から名称が代わった荒木国民学校（現在の久留米市立荒木小学校）に入学した。戦時体制色の濃い『国民学校』への衣更え、その意味合いなど知るはずもなく、ランドセルを背負って無邪気にはしゃぐ１年生を見ながら「ホウ、国民学校か」と祖父が何ともいえないニュアンスでつぶやいたのを覚えている。

その年の１２月８日、大東亜共栄圏をめざし鬼畜米英を相手に大戦が始まった。

日本、朝鮮、満州（現在、中国東北地方）、台湾、委任統治の南洋諸島など日本の勢力圏を赤く塗った世界地図を広げながら先生が、緑色のアメリカ、うすいピンク色のイギリス勢力圏（英本国、カナダ、オーストラリア、インドをはじめ世界各地がピンク色だった）と比較しながら、「日本は１０倍以上の敵と戦うのです。しかし神国日本は必ず勝ちます」などと力説した。

連戦連勝の１７年を過ぎると雲行きもあやしくなりはじめ、１８年になると、「転進」という名の後退が始まった。

衣食が不足しはじめ、学校をあげて荒れ地の開こん作業に従事した。授業は午前中だけになり、午後からはクワやスコップを持ち、隊列を組んで「愛馬進軍歌」や「若鷲の歌」などの軍歌を勇ましく歌いながら荒れ地（現在の久留米市荒木高良台付近）へ行き、食糧増産をめざしてさつまいもなどを生産した。

弁当のおかずも『つけもの』、『うめぼし』など一品だけで、全員でお箸を両手でささげ黙祷して万葉軍歌？『海ゆかば』を合唱し、「兵隊さんありがとう」といってから弁当箱のフタをあけた。

３年生の学芸会ではクラス全員で、日本の兵隊さんが残していった梅ぼし入りのにぎりめしを見たアメリカ兵が「日本の兵隊は強いハズだ。自分の国の国旗と同じものをたべている」といった内容のものだった。

遠足の名称も『行軍』に変わった。大きなフロシキに弁当箱を包んで腰に巻つけ、軍歌を歌いながら急ぎ足で歩くのである。目的地につくと戦場での接近戦をまねて、地面を這って進むいわゆる『ほふく前進』の練習などをした。

昭和１９年、４年生になると衣類の不足は一段と厳しくなり、着るもの全てがつぎはぎだらけになり、理髪店に行くのにもタオル持参となった。

靴の配給もなくなり素足で登校した。冬などさすがに耐えられず、工作の時間に、自分で作ったわら草履をはいた。寒さと栄養不足のため手足はあかぎれだらけでみじめなものだった。

農家だった父は４０才だったが、いつ召集令状がきても良いようにと長男の僕に、農器具や馬の扱い方を伝授しはじめた。

昭和２０年、５年生になる頃は本土決戦、一億玉砕の声がこだましはじめた。６月になるとアメリカ軍の九州上陸も現実味を増し、学校も本土決戦に備える兵隊さんの兵舎と化し、運動場も芋畑になってしまった。

学校を追われた僕達は地区公民館ごとに振り分けられ分校授業が始まった。

朝の登校時は無事だったが、お昼頃の下校時になるとアメリカ軍の爆撃機Ｂ２９が連日のように隊列を組んで上空を通り、北部九州の爆撃に通過するようになった。それまで想像もしなかった大きな機体を太陽に反射させながら、高射砲の届かない高度を悠然と進む勇姿？は敵ながらみごとなものだった。

７月だったと記憶している。分教場から帰宅中、鹿児島本線荒木駅に停車中の客車を２機のグラマン戦闘機が急襲した。その頃の防空体制は完全にお手上げ状態で、敵機が去ってから警報が鳴り出すというありさまだった。

２機のグラマン戦闘機は、何度も何度も執拗に旋回して機銃掃射を加えた。僕達は現場から１㎞程の用水路に隠れたが、急降下の爆音と何とも形容しがたい機関銃掃射の金属音が不気味で、文字通り『身の毛もよだつ恐ろしさ』だった。初めての体験だったし二度と経験することはあるまい。戦場で「天皇陛下万歳」と叫んで死んでいく兵隊さんは怖くないのだろうかと思った。

父にもついに召集令状が来た。８月１５日小倉集合とのことだったが、交通事情の悪化で当日出発は無理だとのことで１４日に出発した。祖父母、母、隣組長さんら１５人位で神社で『武運長久』を祈りそのまま汽車に乗った。

「もっと盛大に送ってやりたいが、満足な祝いの膳も用意もできなくて猪太郎（父の名）がかわいそうだ」

祖母はだれにいうともなくつぶやいた。

８月１５日、この日は天気も良いのにめずらしく敵機が頭上を通過しなかった。

『今日はアメリカは休みかなあ』と不思議に思いながら近所の川に水遊びに出かけた。帰宅して祖父に聞くと戦争が終わったとのことだった。

『ああ良かった。もう空襲がない』あの時の安堵感は今でも残っている。

昭和１９年、『アメリカ軍フィリピンに上陸』の新聞記事を見た祖父が「この戦争は敗けだナァ」とつぶやいてから１年７ヵ月目の終戦だった。